
魔王はここに

藍猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王はここに

【Nコード】

N6573Y

【作者名】

藍猫

【あらすじ】

死んで、気付いたら魔王になってました。

・・・なんででしょう？

「そういう運命なんです！」

「誰ですか！？」

ロリ魔王が生きていく話です。

ぶろろーぐです。(前書き)

書きたいと思っていた魔王&最強系です。

気楽に読んで下さい。

ぶろろーぐです。

私は死んだ。

何もない空間の中で私は唐突に理解する。

・・・あゝあ つまんない

やっと人生の楽しみ方ってやつが分り始めたのに・・・

ま、私なりの・・・だけどね

・・・暇・・・

・・・って・・・ん？

あれは・・・だーくほーるか？

え……ちょ……吸い込まれる！？

い……やあああああああ！！！！？

私は死んで、変な空間を漂って、だーくほーるに吸い込まれた。

私を吸い込んだだーくほーるは、役目を終えたように消えていき、後には何もない死後の世界の空間だけとなった。

私はこの空間で、あのだーくほーるにのまれ、別の世界に転生する ための”私”であり、別にこれは神様のミスだったりはない。だからといって嫌われているわけじゃない。ただそういう”運命”だったというだけ。

ま、私は実際そんなことは知らないのだけど。

とらふゆら

私は今、

だーくほーるの中にいる。

・・・ふじふじ・・・？

ぶろろーぐです。(後書き)

ありきたりな内容でごめんなさい・・・

1話 びしょうじょです。(前書き)

話作るのにはなかなか慣れないです・・・。

ハア・・・

1話 びしょじょうです。

・・・ここはどこ？

視界が開けたら森でした。

普通の森よりも、なんていうか・・・暗い？感じの森。

にしても動きづらい・・・

私はふと自分の体を見る。

「・・・は？」

なんかちっさい・・・

手も腕も脚も・・・まさか・・・

子供になってる・・・？

というかそもそも私は死んだんじゃないかなかったっけ？

・・・私は転生した？？

「……よし。よく分かんないけど理解した。」

私は唯一の自慢である並外れた適応力で今の現状に適応する。

んじゃあ今の姿にも適応しますか……

トテテテ と近くの湖へ駆け寄り、覗き込む。

「……び……美少女……」

映っていたのはまさしく美少女だった。質素な黒いワンピースを着ており、見た目は6〜7ぐらいの小さな少女。それが自分とわかっていても、しばし魅入ってしまうほどの美貌だった。

「……なんか犯罪な気がする……」

この見た目で中身が18歳っていうのが。

ガサッ

「……誰？」

突然の草の動きに対して私は冷静に聞く。何かがいるっていうのは気付いていたから大して驚くことはなかった。

「ほう……。なかなか鋭いようだな。子どもとはいえ魔族ってことか。」

さつきまでこそそとしていた態度とは打って変わって、堂々と意味ありげにニタニタとした男が出てきた。厳つい風貌で、背中には大きな両手剣を背負っている。ニタニタとした目に私は無意識にゾクツとする。

「・・・魔族？」

「あ？その黒い髪と瞳は魔族の証だろうが」

湖は少し濁っていたから色まではわからなかった・・・。

「・・・それで、なんの用？」

「・・・何って、決まってるだろ？」

男の目つきが怪しく光る。

森の中にて、

なんだか嫌な予感がします・・・

・・・じりじり・・・？

1話 びしょうじょです。(後書き)

・・・あ

名前、まだ一度もでてませんね・・・

次ぐらいでだすと思います

2話 うそつきです。(前書き)

「どうしよう」「が最後にくるように
なんだかんだで頑張っています。

2話 うそつきです。

「道案内してくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

先ほどまでのニタニタ笑いが消え、真剣な顔で男が言う。まさか、これほど予想外なことを言われるとは思わなかった私は、10秒ほど口を開け、啞然としてしまった。

「いや、だから道案内を・・・・な？」

「・・・・・・・・いやいやいや・・・・何ですか？」

「迷ったからに決まってるだろ？他に理由があるか？」

「・・・・・・・・ないですね・・・・はい」

緊張していたことが恥ずかしい・・・・。私は脱力し、溜息をつく。そして、目線を男に戻し改めて見て、気付く。男からにじみ出る黒いもやに。またにやりとした表情になっている男は気付いていないようだ。

・・・このもやもやとした森の影響？・・・大丈夫だね・・・？

「どうかしたか？嬢ちゃん？」

男は怪訝そうに聞く。私は思いつき不安そうな顔をしていた様だ。そのことに気づき、すぐに初対面用の作り笑顔を浮かべる。

「いえ・・・特に何もありません。・・・所で、何故こんな所で迷っているんです？」

ここがどこかも分かっていない私が言えることじゃないな・・・。

「・・・ちよつと人を探してて森に入ったんだが気付いたら迷ってたんだ。」

「うそですね？」

「!!」

男の顔が驚愕に満ちる。

人を探して森に入った？こんな危険そうな森に1人で？・・・ありえない。

道案内？こんな子どもに？馬鹿じゃないの？

仮にこの森が危険じゃないとしても、その大きな剣は何のために？

おかしいことが多すぎる。それに道案内を頼むなら、何故隠れる必要がある？

・・・今なら分かる。あの男からにじみ出る黒いもやは嘘を吐いた証だと。あの男が口を開くたびに黒いもやは出ていた。あの男は嘘ばかりだ。こういうやつは嫌いだ……。この・・・

「うそつきっ!」

ザアアアアア・・・

黒ずんだ植物が、私を中心に枯れていった。

今だ森の中にて、

何故か怒りを表わした私の周りの植物が枯れたいきます。

・・・じじい・・・？

2話 うそつきです。(後書き)

・・・ごめんなさい・・・

結局名前出せませんでした・・・

しかもなかなか話が進まないです・・・

3話 びしょうねんです。(前書き)

正直いってまだ名前考えてないんです・・・

まさしく」「どうしよう・・・?」ですね・・・

3話 びしょうねんです。

「うそつきっ！」

ザアアアアア

私の咆哮と共に弧を描きながら草が枯れる。

ただ、枯れたのは地面に敷き詰められた草だけで、大きな植物や木は私の咆哮に合わせて揺れるだけだった。足元の草が枯れたことに気付いた男は、力なくへたれこむ。

「ば・・・化物・・・ひ・・・ひiiiiiiii!!」

恐怖に彩られた声野太い声が当たりにこだます。

そんな男に私は無意識に手をかざす。そして力を込めて言葉を発する。

「・・・死んで？」

瞬間、私の感情と共鳴していた周りの木々が伸び、男を襲つ。

「ぎ……が……ああああああ!!」

ブシュ

その音と共に男の声が途絶える。

木々が戻っていく。そこには血一滴もなく、代わりに枯れたはずの草が広がっていた。男を養分にしたのだろう。草はどす黒い光を放っている。

「……なに?今の……」

私は今起こったことに呆然とする。あの男を殺したのは、多分私。木を操ったのもきつと私なんだろう。でもどうしてこんな力が……?

……もしかして私、転生したのは異世界?

……ならさっきあの男が言っていた魔族っていうのが私……?

「うーんややこしい……ん?」

何かが近付いていることに気づき、考えることを中断する。

ぐんぐんとすごい速さで気配が近付いてくる。

……これは3人?いや、2人か……?……来る!

ザザザアアアア

ザンツッ!!

森の木々から出てきて影は私の目の前に姿を現す。ビュオオオと風が吹き抜ける。

出てきたのは2人。執事服の少年とメイド服のお姉さん。2人も漆黒の髪と瞳で神秘的な顔立ちをしており、その綺麗な瞳で私を見ている。

うわ・・・美形だあ・・・

座り込んだまま呆けていると、綺麗、というより可愛いらしい微笑みを浮かべた執事服の少年（10〜12歳？）が手を差し出す。

「お手をどうぞ?」

・・・やばい・・・すっごくきれい・・・。

きらきらした空間にて、

きれいな少年に目を奪われてしまいました・・・

[illegible]

3話 びしょうねんです。(後書き)

主要人物はどうしても美形になってしまう・・・

願望とかじゃないですよ？

・・・多分・・・

4話 まおうですか？（前書き）

なかなか進まない

やっと魔王についての話になってきました！

・・・魔王城・・・魔王様・・・魔族・・・

ここが元いた世界じゃない・・・つまり異世界だと認めざるえない言葉だ・・・

死んで、吸い込まれて、異世界に転生した・・・と。なんでこんな事になったんだろう・・・

「・・・気になる事はたくさんあるけど、今はまあいつか。・・・うん。その魔王城に私を連れて行って。後、この世界にのことを教えてほしいんだけど・・・いいかな？」

前半は独り言。後半は2人に向けての言葉。

2人は快く引き受けてくれた。ちょっと衝撃的な言葉で。

「もちろんです！！魔王様の言つとおりに！！」「」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ！？」

「さっ。僕におつかまり下さい！」

「へ？あ、ちょー！？」

つかまってつて言うからつかまったのに、何故お姫様だつこするの！？しかもけつこう嬉しそうですね！？

「・・・って、魔王って私なの！？」

「はい！説明は後ですが・・・確かにあなたが魔王様です！僕だけじゃなく、ほかの魔族の人達もあなたの存在に気付いてると思いますよ。きっと」

「・・・何でそう思うの？」

「なんで・・・と言いますと・・・存在が、ですかね？」

「・・・答えになってない・・・」

「と、とにかく存在が魔王様なんです！あ、後、その膨大な魔力とか魅力とかですね」

「魔力？は何となく分かる・・・。けど魅力って？どう見ても私6歳ぐらいだと思っただけ・・・」

え・・・何？この人達ってそっち系なの？うわ、引くわ・・・

「まあその話は後でしてくれるんだよね？そういうことならはやく行こ！」

「「はい！！」」

少年の腕の中にて、

あ．．．まだ自己紹介してない．．．

4話 まおうですか？（後書き）

結局名前はまだ出てないです。

名前が出てから人物像について説明しようと思います。

5話 へんないです。(前書き)

実はテスト中でした(笑)

更新は日々遅れていくと思うので

あしからず・・・

5話 へんないすです。

「見えてきました」

少年・・・ユウの声とともに長かった森を抜ける。本名は『ユウル』『ミージェル』だと来る途中で聞いた。ユウとおよび下さいと言うから ユウ だ。もう1人のメイドのおねえさんは『メリーネル』『リオネラ』で、メリー だ。

ゴウ

耳元で風の切れる音が聞こえる。

少し先には山のように聳え立ついかにも魔王城という風貌の城があった。この辺りは晴れることがないとかで、時折雷の光で照らされる。門の前にはごつい鎧の者が2人（そもそも人なのか？）立っている。

門の前に着くと、鎧が ガシャ と音をたてて跪く。（あ、中身いたんだ）

「よくお越しになられた・・・魔王様」

少し涙声なのにギョツとする。

「ずっと待ってたんですよ。みんな」

ユウが耳元で囁く。

「・・・そうなんだ・・・私はまだ子どもだから気は使わなくていいよ。ところで、あなた達の名前は？」

「お心遣い感謝します。私は『オルス』でございます。」

「私は『ルスオ』でございます。」

「・・・オルスにルスオ？似てるんだね・・・間違えそう・・・ユウとメリーみたいに姓はないんだ？」

「はい。我々のような身分には姓は存在しません。後、我々二人は間違われても結構です。双子ですので。」

「だめだよ。双子だからってそんなこと言っちゃだめ！名前は大切にしないと！」

私の突然の怒りにオルスとルスオは困惑して哑然とする。だが少しして、弱弱しくもハッキリとした声で2人は私に告げる。

「「ありがとうございます！」」

私はそつと微笑み、ユウに中へ入ることを急かす。

その時の私は、ユウの言っていた魅惑の効果があの2人に効いて

いて動けなかったということはない。密かにユウとメリーが頬を赤く染めていたことも……。ただ私は城に入って、でかいな〜としか思っていなかったんだから。

さして豪華でもない大広間の奥には階段があり、その上にぽつんと黒いすが鎮座していた。

え……。ここに座るの？なんか本気で嫌なんですが……。

そんな嫌な予感的中し、私はそのいすに降ろされる。座った途端に何かに覆われる感じがした。別に不快ってわけじゃないからほっておこ……。

『おお〜。あんたが次のご主人様か〜。まあよろしく頼むぜ〜！』

頭の中に声が響いてくる。

……多分このいすなんだろうけど……。うん！無視！

『それはないぜ〜。ご主人様〜』

悲痛っぽい声が木霊した。

変ないすにて、

なんだかめんどくちそうです。

5話 へんないです。(後書き)

少しずつ書く量を増やしていきます・・・

後、これは自分の思うままにやっているので、

話がおかしかったりすると思います。

・・・暖かい目で見守ってくれると嬉しいです・・・//

6話 なまえです。(前書き)

26、27日はボーイスカウトでキャンプでした。

・・・寒かったので、風邪気味です・・・。

地味に書く量が増えていますので・・・

6話 なまえです。

「ユウ。このいす・・・なんなの？」

肘掛をトントンと叩きながらいすを示す。

「？ そのいすがどうかされたのですか？」

あの頭に響いてきた声は私にしか聞こえていなかったようだ。多分このいすは何かが特別なのだろう。

「・・・頭の中に話しかけてきた・・・？」

うまく言葉にできず疑問系になってしまった。・・・いつものように頭がまわらない・・・。見た目だけじゃなく中身まで子どもになったという感じ・・・？

「・・・声・・・。そのいす グリムゾンの声ですか？」

「そのグリムゾン・・・？かは分かんないけど、多分。」

「グリムゾンの声は魔王様にしか聞こえないと云われています。あなたが魔王であることがハッキリしましたね！」

私は ふゝん とグリムゾンを見まわす。

・・・魔王専用ってことか・・・けっこう凄いだ・・・

『けっこうじゃねー！めちゃくちゃ凄いだー！！』

・・・心読まないで・・・？

「ところで魔王様」

「なあに？ユウ？」

「もう少ししたら、ここにこの国のトップが集まります。まあ魔王様のお披露目みたいなものなんですが・・・嫌な態度をとるやつ・・・方がいるかもしれませんが、よろしくお願いします。」

・・・ユウさん・・・今一瞬素がでかけてたよ・・・？

「お披露目って・・・情報はやいんだね・・・」

ぽそつと呟く。

・・・そういえば、他の魔族の人達も気付いてる　みたいなことを言ってたっけ？直感ってやつか・・・？

『魔族ってのは仲間には敏感なんだよ。人間とは違ってな』

・・・ん？予想はしてたけど、やっぱり人間っているんだ・・・。
というより、魔族って仲間思いつてことか？・・・意外。

少ししてからユウが話しを続ける。

「それで・・・名前のことなんですが・・・」

ふん？名前がどうし・・・あ！！

私、まだ名乗ってないじゃん！？人に聞くだけ聞いといて・・・！

「ご、ごめん！私、まだ名乗って・・・」

「それでいいんです！」

・・・つまり名前なんか知りたくない？・・・心にひびが・・・。

「そ、そんな顔しないで下さい！そういうことじゃないんです！魔王様にとって真名^{まな}とはとても大切なものなんです！だからそんな軽々しくお教えしてはだめなんです・・・」

少し泣きそうな顔をした私にユウは慌てて補足する。その様子にメリーが反応し、ユウを軽く睨みながら「・・・ばか」と呟いたのでユウは俯いてしまった。そしてメリーがユウの後を引き継ぎ、説明の続きを言う。

「魔王様は代々転生者だと聞きます。ですので魔王様の真名^{まな}は前世と現在の2つを御持ちということになりますね。」

「・・・2つ？」

「はい。あるはずです。もうひとつの名が・・・。」

「ユウとメリーには教えてもいいの？」

「え・・・あ、はい。あなたが信用できると信じて下さるなら・・・¥¥¥」

今までキリツとしていた顔を綻ばさせたメリーの微笑みはとても綺麗だったと言っておこう・・・。

「・・・ん・・・この世界での名前・・・。」

フツと頭の中に浮かんだコトバがあった。

これが私の名・・・？

「フェノリネル＝ユレイシア」

王の広間にて、

真名^{まな}を知ると魔力が溢れ出てきました。

……びびり……？

6話 なまえです。(後書き)

なにか悪いところなどは感想でお伝えいただくと

嬉しいです・・・

頑張ってなおりますので！

7話 『ゆるる』みーじえる (前書き)

今回はユウ視点です。。。

そろそろ違う人目線でいこうとおもっていたので・・・

7話 『ゆるる』みーじえる』

「フェノリネル」ユレイシア様・・・」

魔王様が・・・フェノリネル様が名をお教えくださいました。

嬉しいです・・・。ぼくを親しい者として受け入れてくださったことが・・・。

そんな歓喜に震えているとフェノリネル様の辛そうな声が聞こえてきた。

「あ・・・熱い・・・よお・・・」

「!？ どうなさいまし・・・ぐっ・・・!」

異変を感じ、すぐに駆け寄ろうとする、が・・・

「近づけない?・・・っ これは魔力!？」

まさか真名^{まな}を知ったことで奥に眠っていた魔力が暴走した!?!しかもぼくやメリーが近づけないほどの魔力とは・・・

パリパリ

電気のような痛みが全身を打つ。

「フェノ・・・魔王様！これは魔力です。落ち着いて抑えてください。」

「・・・これが魔力・・・。んん・・・。」

魔力が暴走すると本人にも辛いもの。なのにフェノリネル様は眉を顰めつつも凜とした凛々しい顔で冷静に対処している。

その光景がどうしても美しく見えてしまう。

見惚れているのはぼくだけでなく、メリーも同じようだ。

少しして、魔力を肌で感じないほどに凝縮されていき、フェノリネル様へと吸収されていく。

「・・・うん。感じは掴めた。」

フェノリネル様の声が辺りに木霊す。

「だ・・・大丈夫ですか？フェ・・・魔王様？」

ぼくより一足先に現実に戻ったメリーはフェノリネル様に聞く。

「うん！全然平気ー。あ、後名前で呼んでくれていいんだよねんか 魔王様 って呼ばれるのなれてなくてさ・・・。フェノリネルは長いから『フェノ』がいいかな。」

さっきまでの重い空気が台無しのような、明るく、無邪気な声で

フェノリネル様が言う。

無邪気な声と無邪気な笑顔とは裏腹に、微かに向けられる殺気。無駄に時間は取りたくないのだろう。

なら、わざわざ時間を取らせることはしないのがぼくたちのやるべきことだ。

「わかりました。ぼく／わたしの主、フェノ様」

その言葉は誓いの言葉。

すべてをささげ、尽くすという示唆。

それが魔王様に仕えるために生まれ、そしてその魔王様に惚れたぼくの精一杯の誠意。

現れるかも分からない魔王様の御付に選ばれたとき　なんでぼくが・・・　なんて思っていたことが、優秀な家系だからと過度に期待され何度も死にそうになったことが、今のぼくの忠誠の前では霞んで見える。

「ふふ・・・ありがとう」

フェノ様が綺麗な漆黒の目を細め、笑う。今までに見せたことのないような笑顔・・・ぼくはこの無垢な笑顔のために・・・ぼく・・・

・『ユウル＝ミージェル』はすべてをささげる・・・

「あなたの為に・・・」

7話 『ゆるる』みーじえる』（後書き）

というわけでユウのフェノに対する思いを主にしました・・・。

とにかく 忠誠を誓った ということを

分かっていたらと十分です

8話 うざいです。(前書き)

たまに間違っている字などを

直してます・・・

誤字が多くてごめんなさい・・・

8話 つづいす。

「私はあなたに決闘を申し込む!!」

「えゝ．．．。いやゝ．．．」

私の不満そうな声に決闘を申し込んだ男．．カイル＝バーサド（15歳くらい）が奮闘する。

まわりにはそれを面白がって見ている者、それを利用し私を見定める者、私に許しを乞おうとあたふたする者、私か男を心配する者が、わらわらとうつろっている。

．．．なんでこんなことに．．．

それは少し遡って約1時間前、私がお披露目の準備をしている時のこと。早めに到着したと思われる貴族の1人息子が私が魔王だと知らずに話しかけてきたことから話は始まる．．．。

廊下の向かいからやってきたこれまた美少年。瞳は金色だが、髪

は私と同じように漆黒だ。

・・・やっぱ魔族だよね？

ふと目が合い、男が話しかけてきた。・・・これが始まり。

「おい。お前」

「ふえ？私ですか？」

「お前意外に誰がいる？ このちび」

かつちーん

「・・・あなたはどなたですか・・・？」

「俺を知らないとは・・・どこの餓鬼だ？ちび」

ぶち

「あのう・・・さつきから何なんですか？一体・・・」

「今日はとても大切な式典の日だ。餓鬼はとつとと家に帰りな。ハン」

ぶちっ

「あーもー・・・。少しは人の話を聞いてはどうですか？それともあなたはあれですか、人語も理解できないくらいばかなクズ虫ですか？あ・・・それだと『くず』と『虫』に失礼ですね・・・」

。　　・ ・ ・ 少しは反論ぐらいしてはどうですか？残念坊ちやま？」

久しぶりに溜まっていたいらいを発散したからか、口調が大分荒くなってしまった・ ・ ・。

綺麗な、誰もが美しいと思うような純粹無垢な笑顔で吐いた暴言は、男にはすぐに理解することはできなかったようだ。しばし目を瞬かせ少しずつ顔が赤くなっていく。

・ ・ ・ 理解おそ・ ・ ・。

「くくっ！なんつだとこのちび！！」

「っ！また　ちび　と言いましたね！？このくそ虫！！」

「だれがくそ無視だっ！」

「あれ！？まさかの字が違う！？やっぱりばかなんですね！？」

そこからは完全に売り言葉に買い言葉・ ・ ・

1時間も2人でギャーギャーとお互いを罵倒し合った。

気付けば式典に来た人達に囲まれ、

「私はあなたに決闘を申し込む！！」

「え・ ・ ・。いや・ ・ ・。」

という展開になっていた。

完全に自業自得なのだけど・・・。

魔王城の廊下にて、

めんどくちそうです。

8話 うざいです。(後書き)

展開的には次は決闘になると思います。

・・・戦闘シーンは苦手ですが頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6573y/>

魔王はここに

2011年11月29日22時46分発行